

---

# 箱庭への転生録

オテオテ君神拳伝承者

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

箱庭への転生録

### 【Nコード】

N6698R

### 【作者名】

オテオテ君神拳伝承者

### 【あらすじ】

階段のアクシデントで死んでしまった<sup>すいで</sup>推出<sup>くろい</sup> 九郎、急遽転生サーピスによりめだかボックスの世界へトリップすることに。九郎というレギュラーにより、めだかボックスの世界はどのように変わっていくのか・・・

めだかボックスの2次創作です。

## プロローグ：箱庭へ

人の死んだ後というのは誰も経験したことがない。

当たり前だ、今までの僕が思うに死んだのなら思考すらできないだろうから。

死んだあとは天国、極楽浄土、地獄、冥府だとか、転生によって新たな生に生まれ変わると言われている。が、死んだあとは何も無いというのが科学者や医学者の考えだ。

さて、僕こと推出<sup>すいいで</sup> 九郎<sup>くろう</sup>は先ほど死んだような体験をしたはずである。それについて少し回想でもしながら思い出していこう

あれは今から36・・・ああ、くだらないことは今は止めておくか。

改めて、あれは確か放課後のこと。授業後にカバンに教科書、ノートを詰め込み帰ろうとしていた。

それで・・・ああそつだ。階段を降りていたら、悲鳴が突然後ろ上方から聞こえてきたんだつた。それで反射的に後ろを向いたのならあらびつくり、目の前には可愛らしい女子生徒が僕めがけて突っ込んでくるではないか。

脳がそれを理解する前に、女子生徒が僕の胸に突っ込み、その衝撃で階段から放りだされたんだつたつけな。

そしてその後、気持ちの悪い浮遊感、後ろ向きで下に落ちていく感覚、僕にダイブしてきた女子生徒が胸の中にある感触、それぞれを感じて僕はようやくこう思ったんだつたな

「ああ、死ぬんだな」ってね

その直後後頭部に一瞬の衝撃と凄まじい痛み、そして頭が地面に打ち付けられる音を聞き、ブツツと意識が途絶えた

こんなもんか。つまり僕は頭を打ち付けて死んだってことか、まったくあつけないもんだな僕の死に方よ。まだまだ生きていきたくたんだが

さて、この現状だっけな。ネット小説とかで死んだあとの世界の描写は、大抵白の世界だったような気がする。しかし今、僕がいるのはそんなところではない。

何というか、あらゆる色があちこちの空間で動きまわり、あるときは混ざり合い、またあるときは分裂して新たな色が生み出されていく、ということが繰り返されている。その中で僕は座っていた。幻想的な風景だなと感心もしていた。

『気に入ってくれてうれしいわ』

！？びつくりした・・・っ！いきなりエコーがかかった女性のハイトーンボイスが耳に響いたのだ。

『あら驚かせちゃった？ごめんなさい』

今のは心を読まれたのか？それとも挙動を読まれたのか・・・よし、試してみよう

綺麗な声ですね

『あら、ありがとうっ』

確定、脳内にハッキング受けて頭の中が丸裸になってる

『人聞きの悪いこと言わないですよ。ここでは声の代わりに思考や念が言語媒体なんだから。』

あれ、てことは今声でないのか？……………  
出なかった

『でしょ？』

まあこうやって思うだけで会話成立するのは便利だと思おう。で、少し質問いいか？

『どござ』

ここどこ？ Where is here？

『有体にいえば死後の世界よ。』

死後の世界が存在すると。いい事を知ったもんだ、いい経験になった。そしてもう一つ。  
あんただれ？

『分り易く噛み砕いて言うと、神様みたいなものかな』

あらゆる宗教団体の皆様よ、神は実在したぞ

『厳密には違うんだけど、そういう解釈でいいわ』

なら便宜上で神と呼ばせてもらおうか。神よ、僕はこれからどうなるんだ？

『本来なら、あなたの意思を回収して在るべき場所に還す・・・というのが普通なんだけど』

なんだけど？

『ある特定の条件を満たして死んだ人には、私が勝手に転生サービスつていうのを行ってるのよ。で、貴方はその条件を満たして死んだわけ。』

その条件とはなんなんだ？

『まず、寿命に達せずに死んだこと。外部からの干渉による死であること。そして、本来死ぬ筈だった者の代わりとなって死んだこと。大体こんなものね。君に飛び込んできた女子生徒は本来あの場で死ぬ筈だったのよ』

うわゝ、とばつちり受けたんだ僕は・・・まあ、あの子が死ななかつただけましと考えるか

『で、転生サービスだけど、簡単に言うと好きな世界に転生していいわ』

その言葉を聞いた直後、胸に期待の灯が燈った。

え、まじすか！！

『マジよ。まあ赤ん坊じゃなくてその姿でそのまま飛ばすんだけどね』

ということとはつまり・・・漫画、ゲームの世界へのトリップ・・・  
！！

一度はしてみたいと思っっていたっ！！

『どこにする？』

少し迷った。どうせなら生存率が高い世界の方が・・・ん、そういえば、あれ面白かったな。ジャンプでは少し不遇だけど設定とか言葉遊びとか個人的に好きだから・・・よし、決めた

めだかボックスの世界へ

『それでいいの？』

うん、全然オツケーだ

『了解。次はそれに際しての特典なんだけど・・・ポケット探つてごらん』

え、ああ。

神の言葉のままにポケットを探っていると・・・ポケットから一つのサイコロが出てきた。

『出た目の数だけ願い叶えてあげるわ』

イッツ運試し！！おいおい、一とかだったら悩みに悩むぞ

『ほら、早くやっちゃいなさい』

明日は明日の風が吹く・・・と、なるべく多い数出てくれよう！

念じながらサイコロを天高く放り投げた。そして落下して目の前で2回ほど跳ねて、出た目は・・・5！

『じゃあ5回まで願いを叶えてあげるわ』

あーよかった、多かった。でも少し考えなければならぬ。では質問と行こう

『どうぞ』

まず、住居とか経歴とかは願いに含まれるのか？

『それはこちらで用意しておくけど、経歴は無いわ』

え、なんで？

『考えて練らなきゃいけないから面倒くさい』

そんな適当な・・・まあいいか。そうだな、願い・・・うーんむ、そうだ

『考えついた？』

ああ。まず身体能力を10倍まで引き上げられるようにしてくれ

『そんなのでいいの？世界最強とか宇宙最強にもできるわよ？』



いや、丁度いい。体の使い方も碌に知らんのに無駄に最強にしたら、逆に危ない

『それならいいけど。あと4つね』

なら、3つ使うぞ。異常1つに過負荷を2つ使えるようにしてくれ

アブノーマル

『ふんふん、具体的には？』

まず異常だが、体感時間を自由自在に操作する異常で

そして過負荷だが、1つ目はあらゆる事柄を禁止する力

2つ目は、あらゆるモノを消滅させる力。3つ共制御可能にしてくれ

『はいはい、で、あと1つだけど』

箱庭学園1年1組に転向させてちよーだいな

『ん？13組とかマイナス13組とかじゃないの？』

関わりやすくなる。以上だ

『ふうん、それならいいわ。じゃあ送るわね。』

おお、体が消えていく・・・情報連結解除か

『くだらないこと言わないの。じゃあ頑張っつてね』

そして、目の前が真っ暗になり意識がシャットダウンした



ブローグ：箱庭へ（後書き）

2次に走りました。不定期になるかもしれません

## 電話：入学式へ

目が覚めたら、そこは知らない天井だ・・・。

少し驚いたせいか、混ざってしまったようだ。ともかく今、目が覚めた。

そして自分のさっきまで起こっていたことを思い出した。ああそうか、僕は転生という名のトリップをしたんだった。

起き上がって周りを見ると、まったくもって見知らぬ部屋だ。元もとの部屋にあった漫画もゲームもポスターも全てが無く、最低限度の物しか置いてなかった。

部屋を出て家を探索してみた。シンプルな2階建てで、2階には僕の部屋以外に和室と洋室があり、階段を降りてみると、リビングとキッチン、トイレ共同の風呂があった。

住みやすいことは住みやすい、しかし一人暮らしにはいささか広いと感じてしまう。

そんな中、冷蔵庫にマグネットで紙が貼り付けられていた。それを見ていると、箱庭学園の入学案内だった。

そして、それを見て時計を見るや否やカバンを持ち、急いで制服を着て家から飛び出した。

「やっぱ、遅れるところだった!!」

集合20分前だった。食事は後でいいや

さて、家を出たは良いものの、問題発生・・・っ

「学園、どこだ」

道のりがわからない。

これはまずい、どうすれば・・・どうすれば・・・ん

ポケットに何か紙が入ってた。それを広げてみると・・・地図？  
その端に何か書かれている。

【道のり分らないだろうから、おまけで地図付けておいたわ】

ありがとう神様。あなたは多分善の神だ

ということ、紙の神・・・じゃないや神の紙の通りに進んで行ったら、見事にでっかい学園にたどり着いた。

さっそくクラス分けの紙が貼り出されてある掲示板に行き、ある生徒を探すことにした。確か金に染めた特徴のある髪だったようなく・・・あ

発見。あの金髪少年こそ、人吉 善吉である・・・間違いないっ！！

さて、さっそく接触を図りたいところだが・・・さてどうする。はつきり言うとは僕はあまりコミュニケーション能力が高いとは言えないのである。このようなチキンである僕が（一応）初対面の人間に話しかけるには相手から話しかけてくるか、何か話しかけるきっかけを作らなければならぬのだ。

というわけで、このまま原作通りに進むと話すきっかけである出来

事が必ず起こるので、まずは場所を把握して1組に行くとしよう。

「しかし、ムダに広いなこの学校・・・あ、学園か」

ノーマル スベンヤル アブノーマル  
凡才から天才、果てには異常や、今はまだないけど過負荷も受け入れられるという学園だ。懐が広いというレベルじゃないというのが正直な意見なんだけどなあ。

一学年十三組とかクジラじゃあるまいに・・・あ、どこぞのめだかのお姉ちゃんじゃないぞ

そして1組発見。すぐさま教室の中へはいつて席を探した。僕の席は・・・廊下側か。そして我らが善吉少年の席は・・・把握。よし。

『1年生の皆さん、入学式が始まりますので列を作り体育館まで来てください』

校内のアナウンスが入った。さてと、人生2度目の高校1年生の入学式だ。どうなるものかね

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

流星は箱庭学園・・・生徒の数がどうかしてるぜ！！

取り乱してしまった。先ほど入学式が行われたが、体育館に入ってくる生徒の数といたらまあ圧巻だった。

そうして、学園長やその他学園関係者の御言葉が伝えられ、ようやく1組に戻ってこれた。

ええ、説明するのもめんどくさくなるほど数に驚いたよ。

さてと、入学式が終わり現在は教師の説明中である。いわゆる自己紹介みたいなものだ。さて、ここで東中出身とか言ったらアニヲタ扱いされるのだろうか、まあ絶対そんなことはしないが。

そして僕の前の席の男子が自己紹介をする。さて、どんな自己紹介にしようか・・・っ！

ネタにしようか、真面目にするか・・・って、前の生徒の自己紹介が終わったっ・・・！

まだ考えついていないというのにどうすれば・・・はっ！こんなときこそ・・・

アブノーマル  
異常、体感時間を自由自在に操作する！ええと、任意にするから・・・ああ！前の生徒が座ってしまう！こうなったら・・・100倍に引き延ばす！！

そう頭の中で叫んだ瞬間、前の生徒の動きがものすつごく鈍くなった。100倍に引き延ばしたから、周りの1秒が僕にとっての100秒になるのか。

よし、前の人が座るのに1秒、僕が立ち上がりきるまでに3秒を費やす！よって総計400秒・・・6分もいけるのか。よし、今の内に自己紹介を考える！えーと、えーと・・・

よし！決めた！

体感時間にして5分、つまり周りにとっての3秒の間に考えついた。そして、体感時間を1倍に戻して、立ち上がりきる。

「どうも、推出 九郎といいます。この世界中のあらゆる人と仲良くなるために、まずはこの教室の皆と仲良くなりたいたいです。友達100人を目指すために皆さんよろしくおねがいします。」

よし、これはいける・・・！この為の5分は生かされた・・・！

と思った時期もありました。皆啞然としており、拍手もばち・・・ばち・・・としか起こっていない。

ただ滑りを経験した僕でありました・・・ちくしょうめええい！！  
すぐさま席に座り、平然を装いつつも内心で悶えた。

さて、善吉の自己紹介であるが・・・漫画では入学式の場面が描かれていなかったなので、どんな自己紹介になるのかと思いきや、ものすごいけだるそうな態度で自己紹介をした。傍目から見たら丸きり不良だなこれ。

こうして自己紹介は終わりを告げた。何という最悪な出だしだ・・・！

そしてようやく解散となった時に一人の女子生徒が近づいてきた。

「ねーねー、さっきの自己紹介ってマジなの？」

不知火 半袖、まさかこのキャラから接触を図ってくるとは・・・！・・・いや、この娘の性格からすれば確実に喰いついてくるわな。ともかくこれはチャンス！



「実を言うとネタが7割でした。後悔も反省もしている。」

「7割ってことは3割は本気だよね？」

「この教室のみんなと仲良くなりたいたいというのは本気だよ」

そう、仲良くしておくに越したことはない。特に善吉とは関わりを持っておきたい、その方がお得だから！

「あひゃひゃ そうなんだ。じゃあ、あたしが友達1000人の1人になってあげよっか？」

よし来た！これはいける！

「よろしく」

「こちらこそね」

よしよし、不知火と仲良くなっておけば、イコール善吉と関係が持てるのは時間の問題というものだ。これは期待ができる。

さて、そんなチャンスを作ってくれた不知火には・・・

「よし、不知火よこの後よろしくの印に食事にでもいっしょ」

「おおー、太っ腹」

この後、財布の英世さんが5枚ほど消しとんだのは別の話だ・・・  
くそう



吉話：入学式へ（後書き）

入学式は本当に妄想で書きました。はい

## 式話・演説へ

『世界は平凡か？未来は退屈か？現実 is 適当か？』

『安心しろ、それでも生きるとは劇的だ！』

『そんなわけで、本日よりこの私が、貴様たちの生徒会長だ』

『学業・恋愛・家庭・労働私生活に至るまで、悩み事があれば迷わず目安箱に投書するがよい』

『24時間365日、私は誰からの相談でも受け付ける！！』

あーやだ、凄い激しいのねこの娘・・・

今の僕の心境が何らかの事情で聞けて、気持ち悪いと思った人よ、あなたは凄く正しい反応をしているのですぐさま保健室へ直行してほしい。酔い止めがもらえるかもしれないぞ。

さて、原作を読んでいる人がこの光景を見れば大体が懐かしみを覚えるだろうが、原作を読んでない人・・・及び、現在僕の周りにいる

生徒諸君ならば、大体が困惑するだろう。これは生徒会長演説なのか？と

僕は原作を見ていたので、この光景もバツチリと把握していて懐かしみも覚えているが、それでも漫画とリアルではその衝撃が違い、幾分か面喰った。

僕の経験した、というか何度か見た生徒会長演説では、生徒会長に当選したから、その目標としてこの学校をよりよくするために、何々に力を注ぎたいです。とか、生徒会長に相応しくなれるように頑張ります！とか、そういう類のものだったはずだ。

まあ、この新生徒会長、黒神めだかにはそんな模範というものが当てはまるはずも無いというのは、僕を含めてこの場にいるほんの数人は十分理解していることなのだろうて。

しかし、その数人以外は当然のことながら、そのような事は分るはずもないので、生徒会長演説終了後に生徒会長の話がクラス中で盛んに行われているというのだ。

「ねえ聞いた？新しい生徒会長の噂」

「私達と同じ入学したての一年のくせに、冗談みたいに態度エルな奴なんだって」

「引くほど美人なんだけど、やることなすこと滅茶苦茶に型破りでさ、先生もビビって手え出せないそうだけ」

ええもうそりゃあ、擬音に「ざわ・・・ざわ・・・」とでも付いてるような騒ぎようだ。しかし僕にとってはあまりにも熟知している

事柄であり、むしろこの学園に蔓延るキャラの濃い生徒達を相手取るにはむしろあれぐらいがちょうどいいのではないかとも思っている。

不知火と僕は善吉少年の横で話していた。善吉は机の上で突っ伏している。

「しっかしあのお嬢様、全校生徒を前によくあんな啖呵が切れるもんだよ、人前に立つのに慣れてるっつーかさー」

あながち間違っではないけれども、少し違っただなそれが

「カツ！ありやあ人の前に立つのに慣れてるんじゃないやねーよ、人の上に立つのに慣れてんだ！」

「そうそう、壇上で僕たちに向って「貴様たち」と言い放ってる時点で少なくとも人の前の85°くらい上から言ってるんだらうと思っうが」

「いや、90°直角からでしかねえよ！」

ちなみに、善吉とは不知火を通じて仲良くなった。不知火は善吉に僕の事を紹介してくれたらしく、この前の自己紹介のただ滑りとそれなりの衝撃により覚えててくれたのも相まって、変人として見られてはいるものの、仲良くなりたいという言葉により友達として受け入れてくれている。

「んー、あーそりゃそうだね、そーでなきゃ一年生で生徒会長になんかなれっこないか」

「常識は障子の如く突き破るモノ、いい時代になったものだ」

「ちよつと突き抜けすぎな感じもするけどねー」

ちよつとどころか、天を突きぬけて宇宙空間を一周するだろうと思  
うんだが

「なんせ、支持率98%！ぶつちぎりのナンバーワンで当選したん  
だもんねー！」

「圧倒的なカリスマだ、一番目を引いたんだろうなあ色々な意味で」

「かくゆうあたしも、あのお嬢様に清き一票を捧げたわけですが」

そして、僕もその一人である。言わずもがなね

「全国模試では常に上位をキープ！偏差値は常識知らずの90を記  
録し！スポーツにおいてもあらゆる記録を総なめ状態！手にした賞  
状やトロフィーは数知れず！実家は世界経済を担う冗談みたいなお  
金持ち！」

ほんと、なにこの超人というか人外は。まさしくラノベやらに出て  
くるヒロインになるために生まれてきたようなものだ、これはジャ  
ンプ作品だが

「全長263・0メートル、高度6万フィートをマツハ2で飛行！  
インテル入ってる！」

さて、ここで悪のりを試してみようと思つ。

「独学でかめはめ波を習得して、更に戦闘力53万！万華鏡写輪眼も有っていて、卍解も所持！ゴムゴムの実の能力者！」

「いや、途中から人類じゃなくなってる・・・というか推出のは完全にジャンプの能力一覽じゃねーか！」

「悪乗りしてみた、反省はしてるが後悔はしてない」

不知火とハイタッチをする。いいなこのノリ

「で？人吉はどうすんの？」

「あ？」

「お嬢様が当選したってことは、とーぜん人吉も生徒会に入るわけ？」

確かにしつこく勧誘されているのをこの教室でも見たっけ、絡まれているときは完全に他人のふりを貫きとおしたが

「カツ！なわけねーだろ！これ以上、あいつに振り回されてたまるかっての」

そう言っつて善吉は立ち上がるが、同時に新生徒会長の黒神めだかが教室に入ってきて善吉の背後に来た・・・ということは

「俺は絶対！生徒会には入らない！！」

と、指を僕たちに突き出してびしっ！と言いつつ、その後ろで黒神生徒会長は善吉のまねをして、びしっ！と指を突き出している。さ



て、心の中で善吉への追悼を願うか

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

不知火も笑顔のまま黙っている。思いは一緒か、なあ友よ

「まあ、そうつれないことを言うものではないぞ善吉よ」

そう言っつて黒神生徒会長は善吉の頭を鷲掴みにする。

「!?!?」

御愁傷様としか言いようのない状況で、善吉はそのまま黒神生徒会長に拉致されてしまった。さて、カバンに教科書を入れるとするか。

「ギャアアアアアアアアア!!」

断末魔が響いたが、何のことだろうなあ

そして、憐れなお人吉の生贄が黒の神に捧げられて数分後

「あれ？人吉の奴何処行つた？」

一人の男子生徒が善吉の席に近づいてきた。

「やあ日向くん。んー？人吉はね、さっきこわーい生徒会長さんに連れてかれちゃったんだよん」

そう、第1話のボスキャラ日向君である。そして後のツンデレキャラである。しかし、こう見たら本当に人畜無害な糸目君だ。腹ではどんな黒いものを抱えてるのやら

「・・・そーいやなんか選挙活動も手伝ってたみたいけど、人吉と例の新会長つてどーいう関係なんだ？」

ここで僕も同調してみる。仲良くなったとはいえ、こちらでは善吉と黒神の関係は聞かされてないからだ。

「ああ、僕もそれは気になってた。やたら勧誘されてたみたいだけど、中学の頃の友達か何か？」

「あー、いわゆるひとつの幼馴染ってやつですよ。ま、あたしにいわせりゃただの腐れ縁なんだけどね」

さて、善吉はこのやりとりをしている間か、その後に生徒会室にて黒神と裸の付き合い・・・というか、黒神が一方的に脱いで話をしている最中だが

「そーいや2人とも生徒会には入るのか？善吉と同じで」

さて、この日向君の問いである。不知火の答えはまあ分つていてと  
して、僕は、どうしようかな

「あたしは入らないよー、だってあたしあのお嬢様なんか嫌いだし

」

「そーなのか、推出は？」

「趣味の時間潰されるの嫌だからいい」

考えた挙句、この返答だ。まあ前から買いそろえていた漫画及びゲーム、ポスター、DVDが一気に消失してたから買い戻しきるまでは入らないようにしようと思う。

「・・・まああんまり立ち入らんようにするか、じゃあな」

そうして立ち去って行った。さてと

「不知火、僕は少し用事があるからこれで失礼させてもらおうよ」

「なんかあんのー？」

「ああ、ちょっとどこぞではか騒ぎが起きそうな予感がするから」

「へー、ま、楽しんできてねー」

さて第1話の要、剣道場に顔を出してみることとする。まあ、もう慣れたから迷うことなんてないだろう！

決してフラグではないと思いたい

式話・演説へ（後書き）

次回、本格的に入っていきます

**参話・道場へ(前書き)**

前回のフラグにより、前半すこしだけ寄り道してしまいます

## 参話：道場へ

実を言うと、僕は今までで迷ったことがいくつかあった。人生の迷いやら、恋の迷いやら、そういうのではない。例えば、友達との待ち合わせでその指定場所に自力でたどり着くことが叶わず、結局友達との携帯の誘導で待ち合わせ場所に到着した。後で怒られたりネチネチと責められたりした。

またある時は、よく行くデパートの駐車場。車を留めた所を見失い、そのまま母に呼び出されるまで自分の車と同じ型の車を凝視しては違うと判断して探し回るといようなことを続けていた。たまに不審者のような目で見られた。

他にも、施設内部があまりにも大きい図書館、複雑な駅の内部、あらゆるところで迷っていた経験がある。つまり、僕は規模が広い所で自分のいるべき場所を見失い探しまわり迷ってしまうということをしてしまうのだ。

まあつまり、何が言いたいのかということだ

「なんでここに？」

迷ってしまった。どうなっているんだ僕の方感覚よ

「あれおかしいな、僕剣道場に向かおうとしてたんだよな、何故柔道部の道場前にいるんだろ」

現在位置、柔道部道場前。確か中にいる主要人物は阿久根あくね 高貴君たかき や

「ジブン、なにぼーっとつたつとん？」

「うおう！？」

急に後ろから話しかけられた。後ろを振り向くと、そこには柔道着姿の短髪の女子生徒が訝しげな表情を浮かべて立っていた。

そう、彼女こそ主要人物、現柔道部部長の鍋島なべしま 猫美ねこみ、柔道界の反則王として名高い人である。さて、この人に今ここで絡まれるというのは少し厄介でもある。後々の展開に影響が出るかもしれないからだ

「あ、もしかして入部希望者なん？なんや、それならそーとはよ言うてーなー！」

どうやら僕を恥ずかしがって中々入ることができないシャイな入部希望者と勘違いしたらしく、僕の腕をとって強引に道場に入れようとしてくる。

これはちよつとまずいと思って、僕は久しぶりに叫んだ。

「ちよ、僕は入部希望者じゃあ！？」

「入部希望でなくても、見学くらいはしていつてーな、参考にもなるでっ。」

というわけで、僕の叫びもむなしく、想定外の柔道部見学となった。どうしてこうなった

僕は、道場の隅で柔道部の活動風景を正座で眺めていた。早く行か

ねばならんというのに・・・

さて、現在柔道部では技の練習が行われているようだ。行われているもので僕が覚えているのは、大外刈りと背負い投げくらいか。それでも基本と思われる型を何度も繰り返し練習している。それが20分ぐらいして終わり、各自相手を選んで対峙している。

お次は練習試合か、実際に組み手をやるらしい。何度も何度も入れ替わり組み手が行われて、投げて投げられ、技を極めて極められてを繰り返ししていく。鍋島部長のモットー

「天才を努力で踏みにじる」が何人もの後輩に受け継がれているらしく、何人かの生徒の動きの無駄のなさは見ていてすごいと思った。

その中で、やはり別格だったのが阿久根 高貴、柔道界のプリンスと言われてるらしいだけあって全く隙がなく、そして技を極める瞬間が速かった。言うならば、気がついたら投げられていた・・・というものか。そしてやり切った顔で戻っていく、その顔はプリンスというだけあって実にさわやかでかっこいいものだった。ああ妬ましい妬ましい。

鍋島部長は後輩の技を見ていて、アドバイスをかけていた。原作ではあんな飄々としていたというのに、やはり部長であるなという風格があった。周りには小物臭さを振りまいていたというが、それも一種の知恵というか擬態なのだと思う。と、鍋島部長がこちらに近づいてきた。

「どうやった？入ってみいひん？ジブン、うちの見所やと中々いけると思うぞ。」



鍋島部長のお墨付きというか、お世辞というか勧誘文句というか、そのような言葉を与えられて少しうれいような気がするけど、前も言ったとおりに、今趣味の時間を削られるのはいささか辛い。しかし、せつかく好意で誘ってくれているのだし言葉を選んで避けさせてもらおうとしよう

「えーと、まだ部活を見て回りたいので、参考にさせてもらおうという事でいいでしょうか？」

「ああ、ええよええよ、無理にとは言わんし。でも入ってくれたらジブンほんまええのになあ。」

「考えておきます。」

というわけで、30分以上の正座にも耐えられずに痺れた足に何度も悶えながら、10分ぐらいかけて道場を後にした。

鍋島部長及び、何人かの生徒は僕の様子を見て、笑いをこらえてたり、噴き出したりしていた。阿久根プリンスでさえ顔が少し笑いで歪んでいた。ちくしょうめい

そして、ようやく柔道部の道場を抜け出して気がついたら既に6時を回っていた。一応柔道部への道のりは記憶したが、しばらくは行かないでおこうと思った。

記憶が薄れるまで近づかない。次に行くのは生徒会が行く時だ、と決意した。

学園をさまよい続けて十数分後、ようやく剣道部道場にたどり着いた。長い道のりだった・・・しかし、今度こそはっ！と思い、剣道部の道場の扉を少しだけ開いてなかの様子をうかがってみると・・・

「うわぁ・・・」

そこには死屍累々となったチンピラ多数と善吉が床に倒れ伏している、その真中で黒神生徒会長が仁王立ちで竹刀を掲げていた。

「何を倒れておる、貴様たち！まだ面、小手、胴を328回打ち込んだだけではないか！」

何という鬼畜、逆に感心してしまうじゃないか。ようするに黒神生徒会長のスパルタ打ち込みによって再起不能となったのか、黙祷。

「で、そこで見ているということは貴様も剣道部入部希望者か？推  
出 九郎」

どうやら見て数秒で気づかれたらしく、名前を言い当てて体をこちらに向けている。観念して僕は扉を開けた。

「いつから気づいてました？」

「道場に近づいてきて立ち止まった気配を感じ取ったのでな、視線を扉の方に少し向けてみると貴様が見えたのだ。」

どこの暗殺者？しかし、リアルで体験してみるとやはり凄まじいものがあるな、黒神めだかの異常性というものは。こりゃあ通常時ではやはり敵いそうにもない、まあ当然のことだが。

「流石ですな、黒神生徒会長。いやあ部活見学に来たんですが、もう終わっていると見ますので僕は退散したいと」

「ほう、部活見学か、殊勝な心がけだな。よろしい、見学だけとは

言わずに実際に体験でもしてみるがいい！」

Why!？いきなり何を言い出すのでありましようか、この生徒会長は。・・・いや、実際に言い出しかねないキャラだったな。見学だけで返してくれる筈もないな、ということは今さらながらに思っていた。

「さあ、その竹刀を取るといい推出 九郎よ！実際に身をもって体験すれば、物事の楽しさというのは勝手に身につくものだ！」

何という暴論。しかし断って背を向けたら、「敵に背を向けるとはなんたることだ！いや、貴様も元は相手に背を向けない正々堂々たる～～」とかいう流れで上から目線性善説を説かれて、出る瞬間に扉の方に出現して、この死屍累々の者たちと同じにされてしまう。・・・！

となれば、ここは一つ黒神生徒会長につきあいがたら、能力の使用法を確かめてみることにしよう！うん、これはいい機会だ！そう自分に無理やり納得させて、壁に立てかけてあった竹刀をとる。

「ちなみに防具は？」

「必要ない！生身で体感するのが一番だ！」

それ何か間違っではないか？

「ではどこからでもかかってくるがよい！」

と、黒神生徒会長は竹刀を構える。なんとというか、どこから打ち込んで逆にも打ち込まれそうだ・・・よし、ここはまず・・・身体能

力を2倍に上げる・・・！

「はああっ！」

竹刀を振り上げて面を打ちに行く。身体能力2倍はやはり凄まじいもので、一気に距離が詰められる。

「せいっ！」

竹刀を勢いよく振りおろす、それを黒神生徒会長は受け止める。竹刀同士が撃ち合う音が道場に響き渡る。

「ほう、中々いい打ち込みだな。あやうく手から落ちそうになったぞ」

「えらく涼しい表情ですな生徒会長さん、よ！」

さらに打ち込む、今度は胴だ。それを黒神生徒会長が更に受け止める。

「はっ！いいぞいいぞ！もっと打ち込んでくるといい！」

やはり凄まじいもので、身体能力2倍上げての渾身の打ち込みも難なく受け止められてしまう。

その後、面とたまに胴を打ち込むが、全て受け止められてしまう。  
何この絶望感

「ふむ、力は凄まじいな、だが・・・やはり、体の使い方がなっておらぬ」

いきなり黒神生徒会長が横に避ける。そのせいで僕は勢いあまって前に進んでしまう。

「ではこちらからゆくぞ！」

その言葉から、黒神生徒会長が此方に接近して竹刀を振り上げる。

こんなときこそ、体感時間を・・・100倍！

周りの時間が遅くなり、黒神生徒会長の動きも鈍くなる。そこで、僕は黒神生徒会長の竹刀の軌道を見る。受け止める形は・・・これだ！

そして体感時間を1倍に戻して、黒神生徒会長の繰り出す竹刀の軌道の上に竹刀を置き、受け止める。

「つく！」

声が漏れてしまうほどに、黒神生徒会長の竹刀は重かった。3倍に上げてこれとか、通常だったら弾き飛ばされてるなこれは・・・

「まだいくぞ」

そこで更に高速で竹刀を振ってくる。それを・・・

「くっっ・・・」

体感時間を引き延ばして軌道を見て、何とか受け止めていた。手が震えてきたぞこれは・・・ということ、受け止めるのはやめて避

けることにした。

これも、体感時間引き延ばしで軌道を見て、時間を戻すとともにすぐさま避ける、という形である。そして、出来た小さい隙を見て竹刀を打ち込んでみるも、すぐさま黒神生

徒会長にたやすく受け止められる。

「いい反応だな！隙を見つけたと思って打ち込んでも避けられるとはな！」

黒神生徒会長は喋ることができるようで、更にピッチを上げてくる。

そろそろ、2倍では辛くなってきたなと思い、今度は3倍にしてみた。その状態で竹刀を振り下ろす。

「むっ！」

黒神生徒会長が少し驚いたような表情を浮かべる。先ほどよりも更に重くなった竹刀に対してだろう。

そのまま僕は3度黒神生徒会長に竹刀を振る。それを3度受けた黒神生徒会長は・・・笑った。

「ほう、更に速くて重くなるとはな、では私も本気でやってみるとしよう！」

「え」

そう言つと、黒神生徒会長は僕の竹刀を押し返してその場から消えた。

「は？」

一瞬何が起こつたか分からなかったが、すぐさま理解して後を見ずにそのまま前方へ飛び込んだ。つま先を掠った感覚がして、やはり、と思い竹刀を構えようとするも

「はっ！」

一瞬で面を捉えられてしまった。

「くあっ!？」

突如襲つた頭上からの痛みに悶絶していると

「いいな、速さも力も申し分ない。が、体の使い方・・・いや、技術が足りないか」

黒神生徒会長が近づいてきた。が、僕は面を喰らって負けたということを理解して、腕の痺れと疲労で何も言うことはできなかった。

「どちらにせよ、貴様も素質がある。剣道部に入れば、更なる向上が望めるだろう!よし、ならばこの後素振り1000回

」

『校内にいる皆さん、下校時刻になりました。準備をして、下校しましゅ』

下校を促す放送が入った。

「ふむ、間の悪い。ならば片付けて下校をしましょう……で、入部するの？」

「す、少し……考えて、みます……」

「まあいいだろう、まだ部活はあるのだ。様々な部活を回って家でじっくりと考えてくるといい」

下校放送に助けられた僕は、ふらふらになりながらも道場を後にした。

そして家に帰り着いたとき、あまりの疲れで意識が朦朧とし、風呂になんとか入って、そのまま今のソファで寝てしまった。

どうしてこうなった……もう一度言おう、どうしてこうなった



参話・道場へ（後書き）

オリジナル展開でございます。次で1話分が終わりたいです

## 肆話：制裁へ

筋肉というのは、強い負荷をかけた後に休息をすると、筋肉量と筋力が負荷に負けまいと、負荷がかかる前よりも強くなるうとするという。

筋肉痛というのはこの一種というのをどこかできいたことがあり、筋肉痛が発生しているときは筋肉の疲労と共に筋肉の増加を表しているというのだ。

かくいう僕は小学校の頃、体育時や休み時間の時に体育館で縄跳び、特に二重跳びが連続で行った翌日に筋肉痛が発生、それが何回も続いていた。他にも小学校、中学校のときのマラソンの練習の時は、何度も足に筋肉痛が起こったものだ。

この時の筋肉痛は尋常ではなく、次の日に学校に行く時はイタイイタイと喚いて登校中に同級生にネタにされたこともあるほどだ。

さて、何故このような事を今さらながらに思い出したのかというと・

「あつで・・・いづつ・・・」

昨日の剣道での無理がたたって両腕、肩、背中が筋肉痛なのだ。尋常じゃない痛さだ。

朝、ソファから起きた時に両腕を動かしたらその痛みに一瞬奇声を上げてしまった。近所の人に聞こえてなければいいのだが。

そんなわけで、朝食など作れよう筈もないが、昨晚夕食を食べていないせいか腹の虫が合唱コンクールを開いてるような腹の音と胃が締め付けられるかのような空腹感に襲われたので、台所に行き食べるようなものを探し回った。

実を言うと、こっちに來てから心配していたのは金の問題であるが、來て初日に家の探索をしたところ、何故か台所にしまつてあつた鍋の蓋の裏側に通帳と印鑑が隠されてあつた。

### 【サービスよ】

という鍋の底にあつた貼り紙とともに。感謝してもしきれないなと思つたね。

通帳の中を見たところ、3の数字とその下についている8個の0を発見した。

一人暮らしをしたことのない僕であるが、流石にこれは多すぎなのではないかと思つた。しかし、サービスとして有り難く受け取ることにするとした。

その後銀行で早速5万程おろした僕は、近所のスーパーでインスタント食品やパンやその他食材を買い漁つた。食材はいつ切れるか分からないと思つたからだ。

さて、話を戻すが、そのスーパーで買ったカップ麺とトーストをその日の朝食として済ませることにした。このさい栄養偏つてるとかそういう突っ込みは無しだ。

そして朝食を早めに済ませて、ソファアに脱ぎっぱなしにしてあつた制服を着て、痛い体に鞭打つて学校に行くことにした。家を出る時に隣の家の人に心配そうな顔で見られたが。くそう

そして学校に着く。すると顔に包帯やら絆創膏やらがつけられた善吉が机に突っ伏しているのを見つけた。

「ぜ、善吉大丈夫か？」

昨日のせいであることは間違いないので、一応聞いておくことにする。

「・・・よう推出、見ての通りボロボロなんだが何か用か？」

「いや、昨日道場で倒れてたから、大丈夫かなとおもったんだが・・・」

「カツ！こんなこといつものことだ、心配には及ばねえよ」  
そういえばそうだった。

「ああそうか・・・おっと、チャイムなった」

というわけで、これから授業に突入するわけだが、寝ずに保つてくれよ？僕の筋肉よ

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

結論から言つと、駄目でした。必死に起きていようと努力するも、睡魔は必ず襲ってくるもの。いつの間にか、受けていた授業の大変の記憶が飛んでいた。

幸運にも、眠っている姿は教師には感知されなかったようで、怒鳴られることは一度もなかった。いや、ああ見えて気づいてて、知らないところで内申点引いてるのかもしれないが。

ちなみに、やっている内容は僕が前の世界で既に受けていたもので、起きようとしていたのも復習のためである。結局失敗に終わったが。

そして4時間目の授業中に、空腹を覚えた時に気づいたのだ、僕にはあの過負荷があるじゃないかと。

あらゆるモノを消滅させるマイナス、脳内で筋肉痛よ消滅しろと思考したら、見事に腕と肩と背中にあつた筋肉痛がまるで嘘であつたかのように消えていた。

まさかこんな所で使い道があるとは・・・今さらながらに、何故今朝使わなかつたのだらうと思つた。

しかしよく考えてみると、痛みを消滅つて結構恐いことだなと思つたので、使いどころを考えようと決意した。

現在、僕は食堂で善吉と不知火と一緒に昼食をとつている。ついでだが、日向が善吉の後ろの席でうどんをすすつている。

「前から思つてたんだけどさー、人吉つてひよつとして頭悪くない？」

不知火が巨大な器に盛つた料理をもつしやもつしやと食べ進めている。ほんと、この小さな体のどこにそこまで入るのであろうか。

「なんで毎回毎回お嬢様のシゴキにつきあつてるんだよ、部外者のくせに。」

「うるせえ」

「そりゃあ不知火よ、黒神生徒会長への愛だよ愛」

昔っからの、公式設定でな

「ぶごっ！？て、ためえ推出！なに言っつてやがる！？」

飯を嘔き出して、顔を真赤にして否定する。そんな顔で言っても説得力無いぞ善吉少年よ

「あれ、違った？幼馴染への長年の好意だと思ってたんだが」

「ん、んなわけあるか！！」

は、「君は黒神生徒会長にツンデレと評しているが、僕を含む全読者はむしろ君がツンデレだという意見であるのだ。人の振り見て我がふり直せという言葉がそのまま当てはまるな、善吉には。

「大体、昔っからどっかずれてんだよあいつは。自分の優秀さにまるで自覚がなくて、そのくせ周囲には自分と同じレベルを求めやがる」

しかしそれが黒神生徒会長というものだろう。むしろ、自分の優秀さを自覚して更にそれを過信して、驕り高ぶるという方がよほどタチが悪い。ま、少しは共感もできるがね善吉よ。

「だからあいつには一生かかってもわかんねーんだよ。努力が実らねー奴の気持ちとか、わけもなくへこんじまう奴の気持ちなんか」

それが黒神生徒会長の異常「完成」ジ・エンドである、か。まあ黒神生徒会長にも努力が実らずへこむ気持ちというのも存在するだろう。絶対的強者であるが故に、努力の实りのないものが。分り合おうとして努力したが、結局叶わなかったあの時の事がね。

「ま、今回はそれがたまたまうまく転んだわけだ。あんなヒデエ目に遭っちゃ、あいつら剣道場には近寄らねえだろ。」

そう言つて善吉はご飯をかきこんだ。善吉はそう思っているのか。まあ、それはどうか？

「……どーだろうね？」

不知火もケラケラと笑いながら言う。

「ああ？」

人吉はそれに不機嫌そうな風に答える。

「人吉つて付き合い長い割に案外わかってないよね」  
あのお嬢様のこと」

人吉が顔をしかめている。おお、頭に矢印が刺さっているのが目に見えるぞ

「『ワルいやつ奴やつつけてめでたしめでたし』あれがそんなカンタンな女だったら、あんたもそんな苦労しなくて済んでるでしょ？」

「ああ、昨日僕も剣道部見学の時に無理やり打ち合いに参加させられたけど、あれは相当難しいぞ」

一度面倒を見始めたら、果たすまで逃がしなどしないだろうな、彼女は。

「冗談じゃない、めでたくなってもらわなきゃ困るんだよ」

突然、善吉の後ろからぼそっと日向の声が聞こえた。その後そそくさと席を立って食器を素早く片付けに行った。

「んん？今、後ろの席に誰がいなかったか？」

「え？」

善吉が後ろを振り向くが、その時は既に日向は善吉の視界から外れたようだった。

「うん、同じクラスの日向君がうどん食べてたよ」

「日向？」

「ああ、僕も見たよ。」

僕は敢えて何も聞いてないふりをする。

「それがどうした（の）？」

はもった。流石は友だ

「……いや、別に……たぶん気のせいだ」



そして食事を終えて、僕たちは食器を片付けに行く。

「ま、いーんじゃない？もうすぐあんたもお役御免なんだし」

「あ？」

「そういえば放課後に二年三年の特待生集めての役員募集の演説があったっけね、学園側主催の。」

「そうそう、人吉は知らなかった？」

「.....」

善吉は黙りこくる。

「生徒会メンバー決まったら、もう振り回されなくていいんじゃないか？」

「よかったじゃんさ、人吉」

まあ、僕は一応こう言うが、実際にはそんなことはあり得ないだろう。黒神生徒会長ならば無理やりにも善吉を生徒会メンバーに引き込むだろう、入るのは善吉からだけだ

その後、午後の授業を受けに教室へ向かった。善吉は終始不機嫌なまま授業を受けていた。何だか分からないけど無性にイライラするってやつか、ああ多分それは、

「自分が一番、黒神めだかの傍にいた。だから、わかっていないなんてことはあり得ない。自分が一番黒神めだかのことを分かっている

る人間だ』

という意地とプライドなのだろう。

確かに、長年続けてきた事を否定されるというのは気分が良いことではないだろう。

10年以上英語塾に通っていていつも英語に対して努力しているのに、お前は英語が分かっていないと言われるのと、同じことなのだろう。

長年積み上げてきた理解する事へのプライドというものは、凄まじいまでに高いものだ。

だが、あまりにも身近で長い間いることで、逆に見れない部分というものはあるものだ。

善吉の不機嫌そうな顔を眺めていたら、いつの間にか放課後になっていた。

善吉はすぐに教室を出て、大股でのっしのっしと歩いて行った。行先は剣道場だろう、原作的に考えて。

「推出ー、今日は見学に行かなくていいのー?」

不知火がけらけら笑いながら話しかけてくる。

「ああ、今日はいいや」

「へー、まああんだだけ痛がってたんだから無理もないかー」

まったくこのロリキャラは、今朝僕が筋肉痛であることを話すと、

笑いながら腕にちよっかい掛けてきたのだ。

あの時はほんと、殴り飛ばしてやるうかなと思った。女子であると自分に無理やり言い聞かせて自制したが。

「図書室行ってみたら、面白そうな本があったからさ、今日はそれを読んでみようかなとおもってさ」

「そうなんだ、じゃああたしはちよつと用事あるから、またねー」

そう言つて不知火は教室を出て行った。

さて、ああ言つたもののは図書室に行く気はない。しばらく教室で寝て、善吉を待とうと思う。

そう思い、僕は机に突っ伏した。そうしていたらいつの間にか意識が遠のいて行った。

「……む……う……」

目が覚める。本格的に寝ていたらしい。机から顔を上げて、あくびをして善吉の机を見る……

「無い……」

善吉のカバンがない。

まずい、寝過ごしたか！急に机を立って教室を出て善吉を探す。すると、前方で善吉が倒れているのをみつけた。

遅かったか・・・まあ過ぎてしまったものは仕方がない。と、善吉がよろよろと立ち上がる。どうやら目を覚ましたようだ

「善吉！大丈夫か！？何があった！」

善吉に駆け寄り、知らないふりをして事情を聴く。

「ああ・・・後から殴られた。」

「誰にだ？」

「分からねえ・・・殴られた衝撃感じたら意識がぶっとんじまいやがった・・・ったく」

日向よ、かなり強く殴ったらしいな。さて、どうやって剣道場に向かおうか・・・

「・・・そうだ、日向・・・間違いねえ、あの時は気のせいじゃなかったのか」

どうやら、きっかけはできたらしい

「わりい、用事ができたから、行くわ」

と言って善吉は歩きだした。・・・つれないな、善吉よ。

「僕も行かせるよ、どうせ見学に行くところだったんだ」

「来んな、怪我するぜ」

「それは、シゴキを受けるからか？」

「・・・カツ！好きにしやがれ」

話に分かるとはいい漢だな、善吉よ

\*\*\*\*\*

最初はよろよると歩く善吉であったが、段々と平気になってきたのか、僕と駆け足で剣道場に向かい、そして到着した。

「勝手なこと吠えてんじゃねえよ、今思い出したわ。俺は昔剣道少年だったんだよ！！」

どうやら間に合ったようだ。門司三年生を始めとして、剣道部の先輩方が次々に竹刀を持って立とうとしている。日向は木刀を持って、少し驚いた表情をしている。

「・・・」

善吉はこの様子を見て、呆れているような、安心しているような表情をしている。いい顔だ

「・・・うっぜ！ドロップアウトした奴が簡単に改心して立ち直るうとしてんじゃねーよー！」

そう言つて木刀を持ち上げる。そろそろか、そう思つた時に善吉は飛び出した。

「剣道三倍段つて知つてつか!? 僕はあんたらの三倍強いつて意味だ!」

そう言つて日向は木刀を上段に構えて先輩方に襲いかかるうとする。・が、振る前に善吉が木刀の真ん中をつかむ。

「ひつ・・・人吉!」

「無刀取りは無理つと・・・たりめーか・・・」

「いやいや、それだけでできれば上出来じゃないの? 善吉よ」

僕も道場に入る。

「推出も・・・! へっ、お前らは妨害すんな 関わらなきゃいーのに」

「・・・別に、その連中が立ち上がらなかつたらほっとくつもりだつただけだな、そして保健室行つてた」

「おや? 用事というのはこの人たちを助けるんじゃないの? 助けたのかな? 善吉よ」

「うるせーよ、めだかちゃんがいねーからさぼってるんじゃないのかと思つて見に來ただけだつつの」

素直じゃないなこのツンデレが

「ああ！？だったらスツこんでろよ！学園施設を不当に占拠してる雑草どもをむしってやってんだ、僕は正しいだろうがあアン！？」

「ああ・・・日向、お前は正しいよ」

学園施設を占拠してた漣中を払おうとした、正しいといえば正しいかな・・・まあ

「だけど、めだかちゃんはもっと正しい」

正の塊みたいなのがやることには流石に負けるか。

「めだかちゃんのやることはいつも正しいんだよ、俺は2歳の頃からその正しさをずっと見てきた」

「あいつのことは俺が一番よく分かってるんだ、無茶苦茶だけど、意味不明だけど」

「あいつの正しさは、俺が一番よく知ってる！」

あまりに身近で見えないことはある、と言ったが、身近で長い間いなければ見えないことは更にある。当たり前だがな

「他人のためだの人助けとかだの、高尚な気持ちは持ち合わせてねーが」

「もしも、お前がめだかちゃんの正しさを否定しようってんなら、そいつは俺が許さねえ！！」

「まあ同意だ。人の正義だの悪だのに一々口を出したくはないけど、それでも今この現状では・・・君が悪に見えてしょうがないんだよ、日向。」

人の正義は時に誰かの悪になり得るってやつだ、正義の正義は、真の正義とは言えないものだ

「・・・ケツ」

日向が唾を吐く。正義を説く人にはもう見えなくなったな。まあ、前からか

「お前らが許さねーからなんだっつーんだよ！俺が悪だからなんだっつーんだよ！」

そう言っただけ日向は木刀を強く握りしめた。さて、構えるか。

「どいつもこいつも面倒くせえ！お前！剣道三倍段って知ってっ

」

日向が言い終る前に、善吉が日向の顔を殴り飛ばす。

「かつ！？」

それに僕が追いついて顔を殴り、落とす。床が壊れたがまあいいか

「知るかつ！」

「同じく」



剣道三段倍なら知ってるがね。．．．まあ、そっちが先輩方の三倍強いつてのは分かったけど悪かった。

今の僕は、5倍なんだよ

\*\*\*\*\*

さて、剣道部の先輩方から床についての追及をされる前に逃げ出した僕は、カバンを持って日向を探していた。

「お、いたいた。」

よろよろと歩きながら、ぶつくさ言ってるようだ。

「くそ．．．人吉善吉．．．推出九郎．．．滅茶苦茶出来るじゃねえかよ．．．ちくしょう！不知火の奴大ボラふきやがって．．．」

あれま、僕も対象に入っている。当たり前か。ん、おっと黒神生徒会長だ、隠れねば。

「だが絶対にこのままじゃ済まさねえ！いつかギツタンギツタンにしてやるぜ！！」

と、ぐぐぐと手に力を込めて握る日向であるが、同じく後ろで手を握る黒神生徒会長。

「まあ、そう荒れるものではないぞ日向同級生」

血の気が引くような音が聞こえたな、まあ当たり前か

「ひっ、ひいっ、せつ生徒会長!？」

日向が腰を抜かす。ああ滑稽だ

「なななっなんで!役員募集会はどうしたんだよ!？」

「うむ、心配には及ばん。ちゃんと代理を置いてきた」

「だ、代理?」

今頃不知火は机に正座して、「Who are you?」「I am a president!」とかいうやりとりを行っているんだろう。アメリカでは爆笑モノだな

「その様子だと、私の幼馴染から随分ときついお灸を据えられたよ  
うだな。まったく、私の心配をしてくれるのは今や善吉くらいのも  
のだ。」

「本当に、ありがたい」

心配してくれる相手というものは本当に大事なものだ、まったく、  
善吉よそういう所にまで思考が及んでいたらな。

「なっ・・・なんだよっ!利用された仕返しでもする気かよ!!!」

「?利用も何も生徒会はご利用いただくためにある、これからも大  
いに活用してくれてよいぞ。」

「言ったはずだ、私は24時間365日誰からの相談でも受けつけ

る。如何なる場合でもその約束に例外はない」

コンビニ並みの貢献精神だな、生徒会って

「貴様に会いに来たのはただの別件だ」

そう言つて、黒神生徒会長は紙を広げる。そこに書いてあるのは・

・

「『クラスメイトの日向君の性格が悪そうだから治してあげて』だ  
そうだ」

流石はロリ腹黒の我が友だ

「しつ、不知火イイ！！悪そうなのでって・・・」

「哀れなことだ」

お、始まるか。ポーズ付きの上から目線性善説。片足を上げて両腕  
を・・・これは・・・

「ギ、ギニュー特選隊!？」

知つてたか日向よ

「貴様もかつては天使のように純朴な少年だったに決まってる。  
不幸にも愛情に恵まれなかつたゆえにそんな独善的な性格になつて  
しまったとしか考えられん」

なるほど、剣道に関しては純朴・・・と言えるのか？



「それは残念だな、では他の部活の見学、頑張ってくれ」

「ええ、わかりました」

そう言っ立ち去ろうとする時、

「感謝するぞ、推出同級生」

と言ってきた。

「……それほどのことでもありませんよ、めだかの会長」

「なんだその呼び方は、よし、貴様もめだかちゃんと呼ぶがいい！」

「遠慮しておきますよ、めだかの会長」

調子のいいものだな、僕も

肆話：制裁へ（後書き）

原作の1話分終了です。

次回、資料が尽きてしまったので、遅くなるか、設定になるかもし  
れません

伍話・橋掛けへ（前書き）

遅くなりました。次話への閑話的な回、それと能力が判明する回です

## 伍話・橋掛けへ

不幸だ、という思いを抱く時がある。ライトノベル界でも最も有名なセリフであるうその言葉は、多かれ少なかれ誰にだって抱く時がある。

歩いてる途中に犬の糞を誤って踏んでしまった、ベンチに座ったらそれはまだ塗装が乾いていなかった、テストで赤点を取ってしまった、有り金つき込んだのに宝くじが一つも当たらなかった。まさしく、これらは不幸であるう事例である。

そして最もショックであると僕が思うことは、上げて落とす、つまり幸せだな僕は、あはははと思いき気が幸せで舞い上がった状態から次の瞬間に不幸に巻き込まれて一気に状態やら状況やら気分やらが落とされることである。

当然ながら、僕も不幸だと思ったことは人並みにある。最も大きかった不幸は・・・失恋、それも幸福の絶頂と思ってた矢先の急降下である。それを今思い返すと凄まじいまでに気分が落ちるので今はやめておこう。

さて、この前に続いて何故僕がこのようなことを思っているのかというと・・・

「おら、さっさと金よこせや！死にてえのかてめえ！」

絶賛不幸に巻き込まれ中だからである。



一体どのような経歴でこのような状況に陥ったのか、まずはそれを今日の出来事から振り返りながら思い出していくとしよう。

めだかの会長と別れて、僕はそのまま家に帰ろうとした。

しかし途中で喉の渴きを覚えたので、近くにあったコンビニに立ち寄り飲み物を買うことにした。

そこで僕は、おにぎり販売コーナーにて、ロシア産ベルーガのキャビアおにぎり、松阪牛霜降りカルビ焼肉おにぎり、さらには本マグロ大トロおにぎりなるものが残り一個ずつ売られているのを発見。うなぎのぼりの好奇心と共に急速に空腹を覚えてしまった僕は、おにぎりコーナーでどのおにぎりを買うかを思案していた。

おにぎりだから、まとめて買ったらいんじゃないのか？と僕は最初に思った、しかしそれはできない。なぜなら・・・この3つのおにぎりは特別枠として設置されており、1個1500円というぼったくりのような値段がついているからだ。

現在の所持金は、2900円。まとめて2個買うとしてもちよつど1000円足りないのだ。

銀行でおろしてこようか・・・とも思ったが、残り一個ずつしかないので銀行に行ってる間にどこぞのセレブ気どりに買われてしまうかもしれない。

というわけで、僕はおにぎりコーナーの前で最高級おにぎり3つをじろじろと眺めていた。通行の邪魔になるだろうかそんなことは一切度外視だ。

すると、隣からおにぎりコーナーを客が覗いてきたのが分った。ま

さかこのおにぎりを買うつもりでは・・・と思っただが、少し見ただけですぐに立ち去った。

安堵を覚えたと共に僕は、買うおにぎりを決めた。よし、ここは松阪牛霜降りカルビ焼肉おにぎりを・・・！そう思って、松阪牛霜振りカルビ焼肉おにぎりに手を伸ばした瞬間・・・

一発の銃声とともに、

「強盗だ！金を出せ！」

おっさんの大声がコンビニに響き渡った。反射で後ろを向くと、黒づくめの服を着て黒いバッグを持って、マスクとグラスとニット帽着用という、強盗である事が物凄くよく分かる格好をした強盗がレジの方で店員に銃を突き付けていた。道中で何故捕まらなかったのだろうか疑問でならない。

店員はがたがた震えて鼻水たらしながら両手を上げている。ヘタレ、と思いたいところだが拳銃突きつけられたら当たり前か。

そして現在に至る。店内では客がそれぞれ喚いて、コンビニを出ようとしたら強盗に威嚇射撃で牽制されたので、今は大人しくしている。何人かは床に伏せているようだ。

「ちっ、どけ！俺がやる！」

がたがた震えて、レジから金を取り出そうとして何度も失敗している店員を見て強盗は痺れを切らしたのか、店員を押しつけてレジから金をバッグに詰めていく。

すると、その様子を見た箱庭学園の制服を着た女子生徒がじりじりと強盗に近づいているのを発見。あれ、どっかで見たような・・・漫画だと一発で分かるのにリアルになると

途端に分からなくなる・・・あ、当たり前か。

強盗は必死にレジの金をバッグに詰めている・・・最中に女子生徒がにじり寄ってくるのを見てしまった。

「てめえ、何近づいてやがる！撃つぞおらあ！！」

銃口を女子生徒に向ける。すると女子生徒が左に向かって跳び、再び駆けだした。それを見た強盗は銃を構えて女子生徒に撃った・・・が、弾は女子生徒の頬を掠めて・・・

松阪牛霜降りカルビ焼肉おにぎりに当たり、松阪牛霜降りカルビ焼肉おにぎりが破裂した。

そう、偶然にも女子生徒の延長線上におにぎり売り場があったのだ。それを見た僕は、何故だか頭の中で何かが切れる音が聞こえたような気がした。

ようやく決めた、悩みに悩みぬいて決めた松阪牛霜降りカルビ焼肉おにぎり・・・一つしかなかった松阪牛霜降りカルビ焼肉おにぎり・・・それが、目の前で、一瞬で、バラバラに弾け跳んだ・・・



「・・・ああ！？どうなつてやがる！！」

強盗がまた引き金を引くが、またもや弾は出てこない。なるほど、このように使ったらこれは強力だな。

強盗が焦り始める。それと同時に僕は身体能力を3倍に引き上げて強盗に跳びかかる。

「くそがあああああ！！」

強盗は銃を放り投げて僕を殴ろうとするが、それよりも速く僕の怒りを乗せた拳が強盗の顔面に突き刺さった。衝撃でグラスサンが割れて、強盗が吹き飛び肉まんの保温ケースにぶち当たった。

それで強盗は気絶したようだ。すぐさま店員が警察を呼んで、この事件は解決となった。が、松阪牛霜降りカルビ焼肉にぎりは帰ってこなかった・・・

ちなみに、警察が来て強盗を連行したときにお礼としてロシア産ベルーガのキャビアおにぎりを頂いた。しょうがないからまた今度買いに行くか・・・

そうしてコンビニから出ようとした時に

「あの！」

後ろから声をかけられた。振り向いてみると先ほどの女子生徒だった。ほんと、誰なんだっけか、見たことある筈なんだがな、漫画で

「えーと、さっきはありがとうね。助かったし、お礼は言っておこうかなあと」

「ああいや、いいですよお礼なんて。正直衝動みたいなものでしたし」

怒りの衝動というものだ。文句あるか

「お礼ぐらいちゃんと受け取りなさいよ、・・・え」と

「ああ、一年一組の推出九郎です」

「ありがとうね、推出君。私は　　っと、電話？もしもし

」

空気読め携帯、もう少しで名前を聞けたというのに

「　　うん、分ってるわよ。じゃあね・・・ごめん、急ぐからまた明日！」

と、走って去ってしまった。・・・速いな、全力疾走であの速さ・・・ん？速い・・・で、見たことあるキャラ・・・あ

「成程、諫早先輩か」

第二話で出てくる犯人であるが、ここで接触しては・・・

「いや、別にいいか」

良く考えたら次の流れに支障はきたさないだろう。屈辱というもの

は簡単には晴れないだろうし・・・しかし速かったな、流石は100m12秒台。僕より4秒も速いとは。・・・さてと

「帰ってゆっくりとこのおにぎりを堪能するか」

世界三大珍味のロシア産ブルーガのキャビア、堪能させてもらうとしよう。そう思い帰ることにした。

そして後からのどの渴きを再び覚えた僕は、途中で自販機を発見して缶のお茶を購入して飲みながら家に着いた。

そういえば先ほど思い出した不幸だという言葉、強盗以外無かったなあ。

そう思つて家上がった直後に何もないところで躓き、懐から転げ落ちたおにぎりを見事に中身ごと踏みつぶしてしまい、さらに持つてた缶のお茶が転んだ瞬間にぶちまけられて、服にかかってびしょびしょになってしまった

ああ、フラグだったか。こんちくしょう

陸話・命名へ（前書き）

今回は、能力名を決めます

4 / 3 0 諫早先輩の事件起こすタイミングを間違えました。すみ  
ません



## 陸話：命名へ

陸話：命名へ

名前というものは呪いの一種である、というのを聞いたことがある。

あらゆるものに一度名前を決めてしまえば、そのものは名前で決まってしまう、その名前に存在意義を縛り付けられる。

名前を書けばその名前の主である人間が死んでしまうノートの漫画を読んだ時に、まさにその通りだなと思った時がある。

その一方では、名前にはそのもののイメージを決定するということもあり、親が子供に名前をつける時には慎重にいかなければその名前でイメージが決まり、そして存在の大きさも決まる。

かくゆう僕「推出九郎」は、八人の兄弟、兄妹、姉弟がいるわけではないが九郎と名づけられた。

後から親に聞いたら、友達の中国人に名づけを協力してもらったらなかった。

中国では「九」が漢字一文字でかける最大の奇数であり、中国では奇数が幸運を示していたということなので、それにならって「人生で9つの最大の幸せをつかみとる男」になってほしいという理由でこの名前になった。日本では「苦」と同音だから不吉だということに、と小学5年生の時に思った。

そしてその思案が具現化してしまったらしく、中学と高校では名前をもじって「苦勞人」という仇名を付けられてしまった。こんちくしょうめ

また、物書きの仕事をしている人にも同じことが言える。漫画家しかり小説家しかり、登場人物の名前や能力、技の名前など、しっかり考えればそのキャラクターの顔と形、更に重要度なども決まってしまう。

それゆえに、印象を強く残そうと凝りに凝った名前にしようとする輩もいる。

しかし、大抵は凝り過ぎて逆に覚えてもらえないという事態が発生する。物事もほどほどにした方がいい、ということだ。

さて、この思案を脳内でめぐらせているのはどうしてだ？という質問に対してだが

「うーん、本当にどうしようか・・・能力名。」

現在自分の能力に名前を与えようとしている最中だからである。

先ほど、最高級おにぎりをつぶしてお茶を頭から被ってしまい、自分の不幸に嘆きながらも玄関廊下の掃除をして、制服をたたんで予備の制服を準備をした。

その後僕は買っておいた冷凍から揚げをレンジで解凍して、カップ麺と一緒に食べた。

「米が恋しい・・・」

米のとき方とかならなかつたので米は買ってなかつたが、流石にカップ麺は飽きる。それだから揚げにはご飯の方が合うだろう。

「今度米のとき方調べてみるか・・・」

面倒くさいがしょうがない。というか、前の世界では家事一切を親に任せつきりだったので色々と苦労している。一応前の世界での見よう見まねで凌いではいるけれども。

親の偉大さを知った僕は、食後に食器を不器用に片付けて、風呂の準備をしていた。掃除もしなければな、とも思い、風呂の湯を入れて、風呂に入った。

風呂に入って今日一日の疲れを湯に溶かしこんでいると、ふと思っ

た。  
「能力名どうしようかな。」

そう、自分の持っている異常性と過負荷の名前である。

西尾維新の作品では語呂合わせの名前が多数見られる。故にこのめだかボックスの人たちも個性的な名前に語呂のいい能力名を有している。

それに当てはめて考えると・・・

「苦勞人・・・だよなあ、西尾さんが僕の位置づけをしたら。

」

中学、高校の仇名がまんま位置づけに使われるなんて、物書きにしてみたなんて使いやすいキャラなんだろうかと思いつつも少し落胆してみる。

「まあそれよりも、能力名だ。」

能力名を付けてみたらこの世界に更に馴染めるだろうし、今僕がつけてみてもいいんじゃないかなと思う。

こういうリラックスした状態だとアイデアが出やすいだろうと思えば、しばらく風呂で能力名を考えてみる。

そして冒頭に戻る。

「語呂のいい漢字にルビだよなあ、やっぱり。」

大嘘憑き（オールフィクション）とかパラサイトシーイング欲視力とか語呂と言葉のセンス良いなとも思う。

能力名が能力の詳細をある程度想像させることができるというのも、良いところの一つでもある。

「となると、能力の中身に関連した名前だよなあ。言葉とかルビとかは。」

そうになると、今現在僕が有している異常性と過負荷をおさらいしてみようと思う。

「と、その前に・・・上がるか」

少し湯につかり過ぎたようで体が火照る。

のぼせてしまったら危ないので、いいところで風呂から上がること

にする。

風呂からあがって、牛乳を一気飲みしてから部屋に戻り、国語辞典とノートを取り出して能力名を考えてみる。

「さて、まずは自分の持つてる能力の詳細から・・・」

能力その1、身体能力10倍までの引き上げ

自分の身体能力を10倍にまで引き上げることができる。

「これは指定してなかったけど・・・異常性でいいか」

というか、これは別に能力名つけなくてもいいんじゃないかなと思う。身体強化だからというか・・・

まあ、一応付けてみるとする。10倍にまで引き上げる、10倍・・・まで・・・はっ！これなんかいいんじゃないかな

『テンライズ・タイマー  
十昇間者』

よし、それっぽくなった。さて次は・・・

能力その2、体感時間の操作

体感時間を限りなく遅くしたり早くしたりできる。

「僕が指定した異常性・・・これは比較的いけるかな」

体感時間の操作・・・時間・・・操作・・・そうさ・・・？

おお、いける！よし、これは・・・

『タイミング・サラウンダー  
時感捜査』

・・・少し強引だったかな・・・まあいいか。お次は・・・

能力その3、あらゆる事柄への禁止

あらゆる事柄へ介入してそれを禁止することができる。

「過負荷って指定だけど、本当に過負荷かなこれ・・・」

禁止ってある意味上からの抑制だから欠陥とかじゃないんじゃないかな、まあしかし禁止ってある意味欠陥を作る要因になるんじゃないかなとも思う。

ある事柄を禁止したら、そこは欠陥になるわけだしね

そう自分に言い訳して、名前を考えてみる。

禁止・・・きんし・・・語呂のいいのは・・・ん？そういえば・・・はっ！

「これは結構いいかもしれない」

語呂合わせではこれは結構良いんじゃないかなと思う。命名……

『エバー・シミツ禁止雀』

よし、これはいいかな。さて、最後は……

能力その4、あらゆるものを消す

これは説明いらないだろうと。さて、これの名前だが……実はもう思いついていたりする。

命名

『デリートゾーン消却炉』

どやあ……はっ！

「誰もいないのにどや顔するとか気持ち悪っ……」

少し妄想が過ぎてしまったようだ。ああ恥ずかしい……さて、無事能力名も決まったことだし……

「寝るか……疲れた……」

今日色々あったので疲れているのだ。正直眠い。

というわけで早速ベッドにダイブすることにした。あ〜ふかふかだ〜

確か、諫早先輩が事件起こすのは一週間後だったよな・・・結構時間はあるが、時間がたったそのときは原作の流れに任せればいいんだが・・・よし、僕も混ぜってみようかな、事件解決に。

そんな事を考えていたら徐々に眠気が押し寄せてきた。楽しみだな〜と思いながら意識をシャットダウンさせた。



## 七話・接近へ（前書き）

今回もオリジナル回です。そして、今回でこの話の方針が決まるよ  
うです

## 七話：接近へ

『どうかしら？そちらの生活は』

目を覚ましてみたらあらびっくり、この前見た死後の世界じゃありませんか。そして耳には神の音が響いているということは僕はもう死んでしまったのであろうか。

なんとという突然の死だろうか、多分布団で息ができなくなっての窒息死とかだろうか

『安心しなさい、あなたはまだ死んではないから。』

死んではないのだって、ならどうして僕はこの前見た死後の世界にいるんだ。

『私が呼び寄せたからよ、貴方にお問い合わせがあるの』

お願い？・・・もしや、こちらに来た時のあの親切心がたつぷりと込められたような紙と貯金通帳は・・・

『ええ、交換材料よ。支援する代わりにこちらのお願いも聞いてほしいわけ』

なるほどね。確かにこちらとしてもあれは助かった、お返しにその願いを聞くんじゃないか

『素直で助かるわ。そのお願いというのはね・・・お掃除よ』

お掃除？なに、この空間にたまってる垢を全部出せというのか？

『違うわ。お掃除というのはそちらの世界のことよ』

めだかボックスの世界のお掃除？何故にまた

『私の転生サービス、何もあなただけが特別というわけでもないのよ』

まあそりゃあ、寿命尽きる前の若者の善人とかだったらそのサービスを受けられるだろうな

『ええ、転生サービスでこれまでも、そしてこれからも色々な世界に送り続けるわ。だけどね、その条件満たすのって何も善人だけじゃないのよ？』

それはまあ、僕のように巻き込まれて代わりに死んでしまった人も・・・いるんだろうなあ可哀そうに。

あれ、これって僕も可哀そうなのか？僕は可哀そうな人なのか？・・・いや、それは少し意味が違うか。

『まあそうね、代わりに死ぬ人というのも多くはないけどいるのよ。そして、その中には良からぬ事を考えている輩もいるのよ。貴方の言い方で言うなら、不良とかチンピラとかかしら』

こちらの世界だったら、ジャンプ好きのごく一部のファンとか僕みたいなヲタも来そうだけどね、そのキャラ達と恋人関係になりたいがためにな。

『ええ、貴方の言うとおり先ほどそちらの世界に何人かが転生したわ』

うえーい！？予想的ですか、そうですね

『で、貴方に頼みたいのはその人達の中に、害を為す存在・・・そうね、キャラクターアンチという輩が来てしまったの』

おいおいそりゃあ、何ということだ。このめだかボックスの世界、アンチが多いというのに。

『それで、私は忙しいから、代わりに貴方にその人のお掃除を頼みたいのよ』

ああ、なるほどね。それはいいんだけど・・・一度請け負うと言った手前こういう質問はぶしつけだろうと思うけど・・・何で僕なの？

『貴方が一番この世界の主要人物に関わったからよ。貴方より先に転生した人はいるにはいるんだけど、その人達のほとんどが特別クラスとか異常クラスとかに行ってるのよ。』

成程、転生者は他にもいたのか。しかし僕以外にも、1組に入ってる善吉たちと関わり合いになりたいと思ってる人はいるんじゃないのか？

『1組にはそうね、2人くらいだったかしら。それもコミュニケーションが取れずに挫折してしまったらしいけど、一応は異常性とか過負荷は持ってるわ。』

哀れ、そしてすまない、君たちの狙ってた位置を取ってしまって。というか僕も危なかったのか・・・

『下手したら位置を取られてたわね。まあ逆上して襲い掛かってくるかもしれないけど、その時は迎え撃つてもいいわよ。殺しても私が回収するから』

そうは言っても・・・殺すことはないだろうと思うが

『とにかく、貴方はこの世界のキャラクターアンチを掃除・・・倒すこと、お願いね？』

了解ですよ、神様

『じゃあ、もう目を覚まさせるわね？そろそろ朝よ』

おおっ、もうそんな時間なのか

『じゃあ、また会いましょう』

この言葉を聞いた後に、僕の視界は黒に染まった。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

知らない天井・・・ではなかった、僕の部屋だ

ベッドから起きて、カーテンを開けてみる。するとそこから朝日が差し込み、僕の視界を白に染める。それと同時にさわやかな風が入ってきて体を通り抜ける

「はあ、いい天気だ」

体が覚醒した。時計を見てみたら・・・6時45分か

「良い時間だな、久しぶりに・・・作ってみるかな」

部屋を出て階段を降りて、キッチンへ向かう。一応は簡単な料理・・・ベーコンエッグくらいは、まあ不器用ながら作れるのだ。というわけで今日の朝食はトーストにベーコンエッグ、あとは・・・冷凍のほうれん草使おうか。

そう思い、冷蔵庫から卵とベーコン、冷凍のほうれん草を引っ張り出す。そしてパンをオーブントースターに放り込み、冷凍ほうれん草を電子レンジにいれる。

フライパンを取り出し、コンロに火をつける。少し経ったらそこにベーコンを投入する、肉の焼ける音とともにベーコンの匂いが鼻孔をくすぐる。

ベーコンをひっくり返して脇によせ、玉子を割りそのままフライパンに投入する。あ

「くそ、黄身が崩れた」

不格好だが・・・まあいいか。

できるだけ形を整えて、そして少し待つ。

「そろそろかな」

火を切り、皿を出してベーコンと目玉焼きをそこに乗せる・・・また形が崩れた。まあ食べれば問題ないか

「こちらもできたみたいだ」

トースターの音が響き、皿を持ってトーストを取りに行く。加減が良かったらしく、こちらは色合いがいい。

「ほうれん草もいいかな」

ほうれん草を取り出して、皿に乗せる。

「よし、いただきまーす」

美味しいものだ、若干不格好だが・・・まあいいだろう、美味しいんだし

さて、食べてる間に少し対策でも立てておくか。キャラクターアンチへの対処方法・・・はつきり言ってめんどくさい。

批判させたい奴には批判させておけばいいと思うが・・・あいにくこの場合は、異常性とか過負荷オーバーロードとかでこの世界の住人達に被害が及ぶ可能性がある。最悪死ぬ人もでるだろうな

とは言うものの・・・誰が狙われるのだろうかね。

一応めだかの会長を守っておけばいいんだろうかな、そして刃向かってきたのなら倒す、か。

そしてストーリーに関われなかった人もいる・・・というから、そいつらの逆恨みにも気をつけなければいけない。まったくもって面倒極まりない。

さて、アンチ組と逆恨み組はどのようなので向かってくるんだろうかな、自問自答・・・そんな装備（能力）で大丈夫か？大丈夫だ、

問題ない、よし終わり。

多分、身体能力が馬鹿みたいに強いやつとか、チート能力とか出てくるだろう。もしかしたら僕の能力に被らせてくるかもしれないが・  
・どうなんだろうか。

とりあえず、どこかで原作ブレイクが発生するだろうと考えてよさそう。それには備えておこう・・・とりあえず、

「ごちそうさまでした」

朝食を終えて、制服を着て家を出る。闇討ちとかは勘弁してくださいねほんとに

しかしそんな願いを聞き届けてくれる人はいないだろうから登校中は警戒しておく。

「くそう、まったくもって面倒なことだ」

めだかの会長だったら、そこいらの身体能力に関する異常性を持つ輩とかは撥ね退けるだろうが、過負荷だったら・・・対処は難しいだろうな

そう思案していたら学園に着いた。

「やー推出、この前はお疲れ」

校門で、後ろから不知火が話しかけてきた。

「ああ、もう話が回ってたんだ」



僕と善吉が剣道場でのいざこざを解決させた、嗅ぎつけるのが早いな

「いやー、まさか普通を体現したような推出がまさかコンビニ強盗を殴り飛ばしちゃうとはねー」

「え、そつち!？」

校外の事でも平気で嗅ぎつけるのかこのロリは

「見直したよー、この前まではへタレだとももってたからさー」

そんな評価を受けていたとは・・・心外にもほどがあるっ・・・!

「じゃああたし先に教室行ってるねー、人吉にもこの事伝えなくちゃー」

そう言っただけきゅるるるという効果音でもつきそうな勢いで走って行った。

「はあ、何ということだ」

仕方ない、教室に向かおうか

「.....るなよ」

ん?今何か聞こえたような・・・

周りを見渡してみる。校門から入ってきた生徒は・・・定められんな。まあいいか、教室へ行こう。そうして下駄箱で靴を入れてたら

「よう推出、昨日はいいパンチだったぜ」

善吉がやってきた。あれか、剣道場の床がぶつ壊れたけど大丈夫だよね、僕

「おはよう善吉、君こそいいパンチだった」

「はっ！お互いさまってか？」

「その通りだ」

そう言っただけで笑い合う。朝からテンションおかしいな僕

その後、善吉と談笑しながら教室に向かった。気が変わったのか、ぶっきらぼうにだが生徒会に入るような事を言っていた。まさしくツンデレの鏡だ、需要は限りなく低いと思われるが

そして教室に入る。

「人吉おーっす　ねえねえ聞いた？昨日推出がねえー」

本当に有言実行に移すかこの口りがっ……！！

「　ね　　そやろ　　」

ん？今何か聞こえたような……？

不知火の話に人吉が耳を傾けている最中、僕は教室を見渡してみるのが、周りは普段通りの朝の教室だ。

気のせいか・・・？いや、もしかしたら・・・逆恨みをしている輩か。どちらにせよ警戒するに越したことはないか・・・

「推出？どうした？」

善吉と不知火がこちらを見ていた。話は終わったらしいな

「ああいや、何でもない」

「そうか？ならいいんだけどよ」

「まさか昨日の事で自分が有名人になってるとか期待してるー？」

「それはない」

話している間も不安は消えない・・・だったら

仕掛けてみるか、今日の放課後にも

七話・接近へ（後書き）

次回もオリジナル展開に、そしてオリキャラ出ると思います

## 八話：掃除へ（前書き）

3ヶ月以上もストップしてて申し訳ありませんでした。不定期更新  
になりそうです。

今回は転生者とのバトルです。

そして……………

## 八話：掃除へ

現在放課後。夕日が西でオレンジ色に輝いている。学校から帰る生徒達や部活動で賑やかなるこの時間帯に、僕は屋上に来ていた。

別に、帰ろうと下駄箱を開いたらそこにハートのシールで閉じられてたラブなレターがあつて、その中に放課後屋上に来て下さいと書かれていたわけでも、何度も死ねと言われていたマのつくヘタレを包丁で刺した後に、目のハイライトが消えたウィッグさんにメールで指示されたわけでもない。

今日の昼休みに一人の男子生徒が来て、放課後屋上に来いや、と敵意満々に言われたからである。

本来ならそんな誘いには乗らずに完全無視を決め込むのだが、その男子生徒はどのキャラクターにも当て嵌まらず、もしかしたらアンの子の転生者かもしれないと思い、渋々ながらも誘いに乗り、来たのである。

さて、僕の目の前には昼休みに僕を呼び出した男子生徒が、腕を組んで屋上の柵にもたれ掛かって立っている。いやにその姿は映える、なぜならその男子生徒の顔立ちを整っており、背丈も高いからだ。そんな男子生徒が、切れ長な目をこちらに向けた。

「遅えな、待たせんじゃねえぞ雑魚が」

不良そのもののような挑発台詞を吐き、目に敵意を籠めて睨んできた。

「出会い頭に人を雑魚呼ばわりなんてするもんじゃないと思うが。」

「うるせえ黙れ。」

聞く耳は持っていないと。これまた面倒な……。

「で、あんた誰？僕に何か用？」

「……俺の名は氷翼凶夜だ。まあ一応、お前と同じ一組なんだがな。そうか、そんなに記憶力悪かったのか。」

馬鹿にするような、人を見下すような言い方だな。

記憶力悪いというか、ただ単に覚える必要もなかったってだけだが。しかしその名前……神のサイコロで変えたか、高確率で顔と一緒に。

「で、用ってのは単に、お前をここでぶち殺すってことだ。」

あらやだ聞きました？人に向かってぶち殺すですってよ？やれやれ、一体どんな教育を受けてきたのだから。

「おいおい、なんで僕が殺されなくちゃいけないんだ？何か嫌な事でもしたか？」

「黙れ、隠そうとしても無駄なんだよ。お前転生者だろ？めだかボックスにお前みたいなキャラは見たことねえ。そもそもって、あの自称神が言うには俺以外の転生者もいるって事だからな。」

自称とか付けられたよ神様。しかし、転生者には他の転生者もこの世界にいるということを伝えてあるらしい。こりゃあ面倒臭いことになった。

「つーわけだからさ、悪いけど死んでもらうわ。」

待って、どーいうわけ？そりゃあ予想はつくけどさ。

「いや、どーいうわけで殺すの。まだ転生者がいるってことしか話されてないんだけど。」

「あ？馬鹿かお前。主要キャラが一番近いお前を殺せば、俺がお前の代わりになって主要キャラに近づけば、原作介入しやすいつてもんだろうが。」

なんという暴論。いやいや、僕殺しても既に善吉や不知火と友好関係あるから介入は難しいと思うぞ。

あれか、まだ関係が浅い内に殺しておこうというのか。そうだとしても、めだかの会長が許すことはないだろう。あの人、一応人殺しをした球磨川を力づくで追い出したくらいだから。

まあそれは置いといて、問題は僕を殺した後何をするかだ。

「なあ、僕を殺すのはまあいいとして」

全然良くないが。

「僕を殺した後はどうするんだ？」

「決まってるんだろ、原作キャラと関わって、原作介入だ。」

「……それだけかい？」

それなら僕を殺さなくても、自分で介入していけばいいはずだ。すると、氷翼の口が吊り上がった。まんま悪人の笑いだな。



「めだかと善吉を殺して、ここを俺のやりやすい場所にする。」  
はいアウト。アンチでした。しかもめだかの会長と善吉って、殺したら完全に原作が崩壊する。

「まあ、今死ぬお前には関係ねえ話だけどな！」

そう言うと、氷翼は低姿勢になり……

姿がぶれた瞬間に僕の懐に潜り込んできた。

「おらあっ……！」

そして腹を殴られて吹き飛ばされた。

「ぐぼっ……！」

地面をバウンドして、腹を押さえる。

「うほっ、うほっ……！」

なんだあれは、移動の動作が全く見えなかったぞ………っ！

追い撃ちを喰らわないように、氷翼を見てタイミング・サラウンド時感捜査を使用して体感時間を百倍に引き延ばす。

氷翼は低姿勢で構えている。移動の瞬間を見極めてやる………と思った瞬間に、氷翼の体がぶれて、そして僕の目の前に移動していた。  
なん………だと………？

そして、氷翼は拳を後ろに引いて僕を殴ろうとする……はっ！

とっさに身体能力を十倍に引き上げて、回避行動をとるべく横に転がろうとする。

すると体はゆっくりと横に傾き始める。

そして、なんとか拳を顔の当たらないギリギリのところまで回避に成功して、時感捜査を使い元の体感時間に戻す。

体が横に転がり、同時に何かが砕ける音がした。

音のした方を見てみると……

「つつつつ!!」

氷翼の拳が地面にめり込んでいた。

「良く避けたなあ!!」

氷翼が拳を引き抜き、こちらを見る。

すかさず時感捜査を使い、こんどは千倍に引き延ばす。

先程よりもゆっくりとした世界で、氷翼はゆっくり、ゆっくりとこちらに向かってくる。本当にゆっくりとしているが、それでも驚異的な速さだ。元に戻した瞬間、目の前に現れるだろう。

しかし、疑問に思った。

なぜこんなに遅いのか、と。

百倍に引き延ばした世界での氷翼の移動スピードは、僕が視認することが出来ない程速かった。

そんな速さなのに、千倍に引き延ばしただけで動作をじっくり確認出来るようになるだろうか？

避ける準備をして、試しに体感時間を百倍にまで圧縮してみる。氷

翼の動きは速くなった……しかし視認は可能だ。次は更に速度が上がりそうなので、今度はさっきよりも早く回避をしようとする。案の定、さっきよりもパンチの速度が上がった。横に転がり、体感時間を戻して、できるだけ距離をとるべくバックステップをして後退する。そして氷翼の方を見ると……

「よお、鬼ごっこは楽しいかよっ!!」

「ぐおっ!?!」

いつの間にか目の前に氷翼があり、無防備なところを回し蹴りでフエンスまで蹴り飛ばされた。痛い、痛すぎる。

堪らず咳こむ、しかしそんなところに氷翼が目の前に現れて僕の首を絞め上げる。

「死ね。」

「ぐっ……!!」

まずい、このままだと絞め殺される……! とっさに、氷翼の顎を蹴り上げる。

「ぐっ……!!」

油断していたらしく、あっさりと僕を手放してよろめく。

「げほっ、げほっ……」

咳こみ、息を整えて、体感時間を千倍に引き延ばす。  
氷翼はこちらを睨みつけて、そしてゆっくり、ゆっくりと低姿勢になる。

いつでも避けられるようにして見ていると、氷翼の体がぶれて、僕の目の前に現れた。

やはりそうか。僕は氷翼が現れた瞬間に横に転がるようにして、時間を圧縮した。

氷翼の蹴りを避けて、直ぐに立ち上がり氷翼を見た。

「また避けやがりやがって……とつとと喰らえつての！」

氷翼は床にめり込んだ拳を引き抜きこちらを見る、それと同時に僕は拳を引く。

「ああ？俺を殴るうってか。ちつ、調子に乗りやがってよお！」

氷翼が低姿勢になる途中で、体感時間を千倍に引き延ばす。

さてと、予想が当たれば……

しばらく待つと、氷翼の姿がぶれた。今だっ！

体感時間を元に戻すと同時に腰を下げてストレートを繰り出す。

「ぐぶっ！」

現れた氷翼の顔面に拳が突き刺さり、氷翼がよろめく。

その隙を狙い、顎を蹴り上げる。

「がっ！！！」

少し吹き飛び、仰向けで氷翼は倒れる。

そして僕は、その隙に禁止雀を氷翼エバー・ジュミットに使う。さて、成功するか……？

「くっ……？お、起き上がれねえ……！？」

成功だな、起き上がりの禁止。

「て、てめえ何しやがった！！」

「能力使って起き上がれないようにしたよ。」

ついでに……と

「ちっ、なら……っ、な、なに！？ふんっ！くっ！」

「あーそうそう、能力行使も禁止したから。」

「なんだと!？」

便利だな〜禁止雀。というか、最初からこれ使ってたらよかった。

「それにしても良い能力だな、瞬間移動とは。」

引き延ばした時間の中での速さの違い……単に能力使ってたけだけだ  
ったというね。

後、あのパワーは神のサイコロで手に入れたものだろう。正直十昇  
間者と時感捜査じゃやられてたかもしれない。

「くそっ！元に戻しやがれてめえ！！」

「嫌だね。さて……。」

神様はアンチを掃除してくれって言ったが……  
倒したくらいじゃあ、この様子だとまた何かされそうだな……。ア  
ンチ思考だし、やりたいようにするって言ってたし、ハーレム築く  
とかやりかねないな。  
……殺す？……いや、それは……しかし……どうしようか。  
禁止にしたまま……能力だけ禁止にしようかな……  
よし、一度試してみよう。それでもダメなら……仕方ない。  
まあやってみよう。

「なあ、今後僕に手を出さずにめだかの会長……黒神めだかと人吉  
善吉、というかこの世界の住人を殺さないと約束するなら、能力だ  
け封印して元に戻してあげるけど。」

さあ、どうする。

「……ちっ、仕方ねえ。分かったよ。」

言葉は正しいが……

「何を分かったんだ？」

「お前に何もしねえし、キャラクターにも手出ししねえよ！……だか  
ら早く！」

「わかったよ。」

さて、禁止雀の解き方……どうするんだっけ。

あー、面倒臭いから焼却炉デリート・ゾーンで消すか。  
起き上がりの禁止を消して、と。

「ほら、起き上がれるだろう。」

「……おっ、本当だ。」

さて、帰る

「死ねええええええ!!」

振りをして、氷翼の方を向き体感時間を千倍に引き延ばすと、既に氷翼が間近に迫ってて、拳を僕の顔面に今まさに叩き込もうとする光景が目に入った。

……もう容赦はいらないな。

体感時間を十倍にまで圧縮して、拳が当たった瞬間に消却炉で衝撃とダメージを消す。  
そして体感時間を戻す。

「……………え？」

呆然とした様子の氷翼に手を伸ばし、

「消え失せる。」

消却炉を使い、消した。

……………終わり、か。

「いっつつつ……………」

今更氷翼のダメージが来たか…………。傷とダメージを消して…………と

「殺した……か。」

正確には消した、だが。

しかし感覚的には一緒だろう。

「……………帰るか。」

めだかの会長や善吉、他の人達に被害が及ばなかった、そう割り切らなければ。

これでよかったんだ、これで。



八話・掃除へ（後書き）

次は……多分原作介入です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6698r/>

---

箱庭への転生録

2011年9月2日18時24分発行